



イネ育苗中における苗立枯病害の防除対策

イネの「健全な苗づくり」は、昔から「苗半作」と言われて、田植え後の順調な活着や生育を促し、しいては収穫の良し悪しをも決める重要な管理作業です。

しかし、現在の箱育苗においては、育苗箱に密に播種され、被覆資材を利用して加温や加湿する管理技術であるため、基本技術を怠って、不適切な管理や環境状態になってしまうと、苗の軟弱徒長や各種病害の発生しやすい状況になってしまう恐れがあります。

育苗中に発生する病害対策としては、予防が基本で、種子や育苗資材の消毒を徹底し、健全育苗には適して、病害の発生には不適な環境づくりを維持し、適正な灌水管理などを励行することが重要になります。しかし、不幸にも病害が発生した場合は、早期に、防除対策を実施する必要がありますが、イネで育苗中に使用できる苗立枯病害に有効な登録農薬が極限られているため、薬剤防除と合わせて、耕種や物理的防除などを積極的に取り入れた総合防除で対応する必要があります。

1 育苗中に発生する主な病害

- 1) 細菌病として、種子伝染するもみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病がありますが、特に問題となるのは、もみ枯細菌病です。これら細菌病を病徴で区別することはなかなか困難ですが、もみ枯細菌病の発病株が、他の細菌病の発病株に比べて、心葉が比較的容易に引き抜けることが特徴とされています。細菌病はいずれも、高温、多湿条件で発生しやすくなりますが、種子消毒をする以外で防除する登録農薬は無く、発病してからでは耕種や物理的防除による被害拡大を阻止するしか方法がありません。
- 2) カビによる苗立枯病として、①ピシウム菌、②フザリウム菌、③リゾクトニア菌、④リゾープス菌、⑤トリコデルマ菌が関与する場合があります。これら 5 菌のうち、①ピシウム菌だけがカビの発生が見られませんが、その他の 4 菌では特徴的なカビ（②フザリウム菌では、モミを中心に白色ないし淡紅色のカビ、③リゾクトニア菌では、クモの巣状の白いカビや菌核、④リゾープス菌では、表面全体に白色～灰色のカビ、⑤トリコデルマ菌では、表面やモミに、初めは白色で、後に青緑色に変わるカビ）が発生すると、区別することができます。
- 3) 水稻育苗管理の注意点については、「営農NEWS 第 2521 号（平成 29 年 3 月 15 日発行）」を参照してください。

第 1 表 イネ育苗中における苗立枯病の主な防除薬剤（平成 29 年 4 月 3 日現在）

薬剤名	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾクトニア菌	リゾープス菌	トリコデルマ菌	希釈倍数および使用方法	使用時期	使用回数
タチガレエースM液剤	○	○				500～1,000 倍液を、育苗箱 1 箱当り 500ml 土壌灌注	播種時または発芽後	1 回
タチガレン液剤	○	○				500～1,000 倍液を、育苗箱 1 箱当り 500ml 灌注	播種時または発芽後	2 回以内
ダコニール 1000				○		500～1,000 倍液を、育苗箱 1 箱当り 500ml 土壌灌注	播種時～緑化期、但し播種 14 日後まで	合わせて 2 回以内
ダコレート水和剤		○		○	○	400～600 倍液を、育苗箱 1 箱当り 500ml 灌注	播種時～緑化期、但し播種 14 日後まで	
バリダシン液剤 5			○			1,000 倍液を、育苗箱で 1 箱当り 500ml 灌注	播種時～発病初期	1 回
ランマンフロアブル	○					1,000 倍液を、育苗箱 1 箱当り 500ml 土壌灌注	発芽後～緑化期	1 回

注) 1 育苗箱は、30×60×3 cm で、使用土壌が約 5l です。なお、上記以外にも処理方法がありますので、適切な処理方法をラベルで確認してください。

2 タチガレエースMおよびタチガレン液剤には同一有効成分が含まれていますので、総使用回数に注意してください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040